

ISSN 0919-2751

スポーツ社会学研究 第11巻/2003

日本スポーツ社会学会発行

2003年3月21日

pp.1~12

スポーツにおける敗北

——日本のプロ野球は失意をどう意味づけるのか——

W. W. ケリー

■特別寄稿

スポーツにおける敗北：

——日本のプロ野球は失意をどう意味づけるのか——

W. W. ケリー¹⁾

抄 録

この論文は、近代スポーツに潜む深遠なアイロニーについて論じる。それは、スポーツ場面において、われわれの多くがしばしば経験する勝利ではなく負けについて、あるいは成功を味わうことなく、敗北に直面することについてである。勝利の満足ではなく敗北の失望は、プレーヤーにも観客にも共通している。

本論では負けることに関して大まかに3つのタイプに分ける。ひとつは絶えず必要に産み出される敗者のような「日常的な敗北」、そして、解雇、放出、辞職といったような完全な失敗としての「致命的敗北」、さらに前二者の中間にあって、負けを繰り返す「反復的敗北」である。反復的敗北は受け入れることと説明することが最も難しい敗北である。

地域の絶大な人気を誇るが負けてばかりの大阪プロ野球チーム、阪神タイガースを事例として、プレーヤーとファンが如何にして反復的な敗北を捉え、調整して、そして受け入れるのかを、いくつかの要因によって分析する。これらの要因には、多くのスポーツに共通の要因、スポーツとしての野球に特有な要素、日本の野球に特有な要因と阪神タイガースに特有の言いわけを含む。著者は苦々しい敗北という結果にもかかわらず、人々はプレーし続け、また見続けるという文化的に屈曲させられた言いわけと構造的なパターンのセットを識別しなくてはならないと考える。そして、さまざまな場面で「敗北の論理」は単一の要因によって説明されるものではなく、複合的なモデルによって説明されるものなのである。

キーワード：日本プロ野球、敗北、阪神タイガース、ファン、近代スポーツ

1) エール大学文化人類学部

Department of Anthropology, Yale University USA.
E-mail: william.kelly@yale.edu

はじめに

1999年6月9日、阪神タイガースは大阪ドーム球場において広島カープに2対1で辛勝し、セ・リーグ1位タイを勝ち取った。これは過去6年間で5回、リーグ最下位に甘んじたチームにしては青天の霹靂であり、各紙がこぞって取り上げたように通算2209日目での初快挙であった。ところが、この1位は長くは続かなかつた。たった6日で1位からの転落が始まり、7月中は負け続け、ついには再び最下位でシーズンを終了した。しかも、翌2000年も2001年も最下位に終わってしまった。

この先、予想外ながらエキサイティングなシーズン始めの好成績と、今となっては惨めとはいえ、お決まりの転落はマスコミの注目となった。それぞれの選手の成績や怪我、コーチングのミス、監督と選手との意志疎通のまずさ、球団のフロントの無能さ、オーナーの「けち」さ、その他もろもろの要素が、転落の原因の説明やあるいは責任回避の説明として使われた。しかし、シーズン半ばのつかのまの大勝と最下位への転落のどちらについても、当然ながら一致した説明はできなかった。

敗北のアイロニー

日本プロ野球の理解のために、著者は阪神タイガースを調査して4年になるが、その徹底した弱さは近代スポーツのアイロニーというテーマを浮き彫りにし、著者の様々な思いを巡らせることになった。スポーツは150年以上にわたって、一般的な娯楽であったし、あるときは儀式であったし、身体的訓練やレクリエーションであった。カエル跳びからウルトラマラソン、スヌーカー(玉突き)、アメリカン・フットボールにいたるまで、何十という数のスポーツは、現代では合理化され、大衆化し、プロ化し、商業化し、グローバル化した。地域のふれ合い、民族意識や愛国心の高揚、企業利益など、今やスポーツは日常生活にはなくてはならないものとなっている。そ

して、この「近代化」において、レジャー、遊び、訓練、儀式としてあったスポーツは競技へと変容していく。すなわち、勝者やチャンピオンを決めるためのルールに則った競争になったのである。時として、全世界的な観衆の注目、アスリートの成績を計測し比較するための精確な記録、スポーツをプロデュースするための巨額の投資と利潤、スポーツイベントを演出するための精巧な組織といった要因は、闘争心を煽り、大会の賞金を持ち込み、勝利の重要性を強調し、成功への要求を高め、失敗を恐れさせる。

ここにこそアイロニーがある。なぜなら、われわれ多くのものにとっては、スポーツは勝ちよりはむしろ負けを例外なく意味しているからだ。スポーツとは成功の美酒をあじわうよりは、負けの辛酸をなめることなのであるとも言える。「勝ちがすべてだ」とは、アメリカの伝説的フットボール・コーチ、Vince Lombardiの有名な持論であった²⁾。しかし、20世紀中最も愛された4コマ漫画の作者として知られる Charles Schultz(スヌーピーでお馴染みの)は、好んで草野球に題材をもとめ、はるかに深い洞察力を示した。彼は言う。「勝利はつかの間、でも負けはずうとついでまわる」。

日本シリーズは12球団で争われ、10月にただ一つの覇者がうまれる。メジャーリーグはそのほぼ2.5倍のチームで、ワールド・シリーズのチャンピオンを目指して戦う。2001年のツール・ド・フランスは189人のアスリートの中から、Lance Armstrongというチャンピオンをうんだ。Royal Lythamでのブリテイッシュ・オープンでは128人のゴルファーがティー・オフし、ニューヨーク・シティ・マラソンは1万人でスタートするが、男女それぞれ「一人」づつがチャンピオンの座に輝くだけである。このような近代スポーツの状況は枚挙に遑がない。スポーツでは努力が勝利と結びつくことはめったになく、むしろ多くの場合、努力しても敗北に終わり、ふたたびさらなる努力を重ねることになるのである。そして何処がまずかったのか、誰がしくじったのか、みんなが、いや自分のいたらなかったのはなぜなのかを探求することになるのである。

こうしたことから、著者はスポーツにおける敗北のダイナミクスを研究するようになった。どうやって敗北を受けとめるのか、アスリートとしてあるいはそのファンとして敗北をどう受け入れるのか。みるスポーツにおける運・不運、弾劾と責任追及の構造とは、どんなものなのだろうか。

敗北の形態

さて、スポーツ(そして、人生もまた)の敗北はよくあるとはいえ同じではない。つまり、期待や要求に応えられないことは、誰にでも何時でもあるが、それぞれの敗北は様々なのである。著者自身のするスポーツ、見るスポーツの経験から考えて、負けあるいは勝てないことには、おそらく少なくとも3つのタイプがあるのではないだろうか。

第一に「日常的な敗北」である。つまり、敗者は必ずつくられる。スポーツの本質は競争である以上、勝者と敗者はつきものなのである。とは言え忘れてはならないのは、(1)ひとりの勝者に、何倍何千倍ものおびただしい数の敗者がいること、(2)敗北に至りうる局面の多様性の2点である。野球では、ピッチングの一球一球、すべてのプレイ、連携プレイ、ゲーム、シリーズ、シーズン、そして選手の出世に、ひとりの勝者と多数の敗者が存在する。多分日常的な敗北があまり頻繁なので、個人的な失望感や悪意にみちた中傷、制裁といった結果は必ずしも伴わない。バントの失敗、三振、敗戦、シリーズ優勝や新記録の樹立をのがしても、ファンの声援を得たり、個人的に奮起するきっかけをもたらしたりする。

第二の敗北はとて異質で、「致命的敗北」または「決定的敗北」と言えるものである。これはあまりに完ぺきな敗北ゆえ、降板、放出、解雇、辞任といった表現で表される契約の打ち切り、選手生命の終わり、チームの解散、リーグの終結、ひいては野球というスポーツの終焉をも引き起こしかねない²⁾。これほどのものは、日常的な敗北に比べると、めったに起こらないもの全くないとは言えない。日本の球団に雇われ

た外国人選手(2001年は70人)のほとんどは、1年で解雇または契約更新なしに終わっている。

第三は「反復的敗北」あるいは「慢性的敗北」で、第一と第二の中間にあたるものと言える。これは常に負け込む状態だ。野球では長年にわたりこうしたチームがいるもので、たとえば、阪神タイガースは過去10年最下位で、日本シリーズでは過去50年に一度しか勝てなかった。また、1918年以来ワールド・シリーズで勝てないポストン・レッドソックスの成績もそのことを物語っている。さらに個人のアスリートにもこうした不運はあるようで、プロ・ゴルファーのColin MontgomerieやPhil Mickelsonは長年、四大プロ・ゴルフ大会のどれにも優勝できないでいる。どんな敗北も問題なのは、すべての競技スポーツ、特にプロ・スポーツは勝つことに価値があるからである。しかし、なかでも第三の反復的敗北が最も不可解であり、そのため著者は阪神タイガースという負けてばかりのチームにもかかわらず、あるいはそれゆえに人気のあるチームに注目した。4年間の観察の後、著者には阪神タイガースが弱いのに人気があることは、まだ謎のままである。どうして、選手も、コーチも、球団も、オーナー側も、何百万のファンも、毎年毎年、相変わらず野球をし、監督し、応援し続けるのだろうか。結論的に言えば、著者がこの論文で主張したいのは、敗北の「論理」はひとつではないという点である。なぜ執拗に負け続けてもプレイを続け、観戦を続けるのか、これに対する納得のゆく自己言及的な説明はみあたらない。むしろ、負け続けても突き進むのにはいくつかのレベルでの説明が考えられ、その錯綜した因果関係こそ著者はここに提示したい。

頻繁な敗北トーク

敗北に順応する様々なありかたの説明に入る前に、いくつか基本的な問題にふれなくてはならない。まず、敗北はスポーツの世界では常識で、隠されてはいい点を忘れてはならない。敗北が頻繁にはっきりと起こるという前提のもとに、敗北があたりまえで普通の経験なのだから、

また敗北は勝利に対する欲求を脅かすのだから、スポーツ界は示し合わせの上、敗北をまるでないかのように装うと仮説をたてることもできよう。そうすると、どこにも問題はみつからないことになる。

ところが、現実はその逆なのだ。敗北トーク(敗北に関する言説)はどこにでもある。阪神タイガースでは、監督もコーチもずけずけと選手を批判するし、球団は選手成績に冷血な評価を下すし(年俸交渉をみれば明らか)、メディアなかでもスポーツ新聞は、ことあるごとにエラーの張本人やらミスや弱点の意味を書き立てる。そのうえ、ほとんどのスポーツの行為は「敗北の結果としての行為」でもある。たとえば、新人のドラフト、選手のトレード、監督の交替、新しいテクニクの導入、練習の強化、戦法の工夫などの変化は、敗けがあって初めてその克服が望まれ、なんとしても勝ちたいという意欲の結果起きる行為なのである。

そこで、野球のようなスポーツでは、敗北なり勝利なりを説明することが、いかにアイロニカルで困難なことなのかを示してみたいと思う。みるスポーツのなかでも、とりわけ野球は高度に分析されて、全てが統計化されている。野球は攻撃と守備が交代するインターバルのあるスポーツであって、いつでも選手が走りまわる流れのスポーツではない。したがって、選手、コーチ、観客ともにプレイを切取ってきて反芻し、その時の選手・チームの記録を出しては楽しむことができる。野球は自転車競技やバスケットボール、サッカーのような流れのスポーツに比べれば、ターニング・ポイントとか決定的プレイとか致命的なミスとかを割り出し、プレイや傾向を数値化することは容易なことである。しかし、勝利と敗北を説明するのは他のスポーツと同様、容易なことではない。なぜ選手はミスをおかしチームは負けるのだろうか？ 欠けているのは何なのか？ 肉体的素質か、集中力がきれたのか、努力が足りないのか、スター性が乏しいのか、チーム・プレイがだめなのか、怪我か、ツキか、ジンクスか？

また、「誰」がどのように負けたかは、なぜ負

けたかに劣らず難しい問題である。というより、誰でも少なくとも何度かは敗北するが、「誰」の日常的な敗北が決定的な集団的敗北あるいは慢性的な敗北に対して責任があるのか？ それはなぜなのか？ 次のような疑問が浮かんでくる。

- ・ひとりの責任？ 何人かの責任？ 全員の責任？ 仮にそうならばヒットがたりないのか、攻撃・捕球の連携・守備に覇気がないのか、ピッチャーがだめなのか？
- ・監督やコーチが悪いのか？ 選手のやる気を引き出せないのか？ 教え方がまずいのか？ みずからゲーム・シリーズ・シーズンを勝ち抜く戦略に乏しいのか？
- ・球団の責任はどの程度なのか？ 特にゼネラル・マネジャー(そしてときにはスカウト)が必要な人材を掘り出し、契約にこぎつけ、契約更新できない場合の責任は？
- ・個人資産家または親会社であるオーナーの責任は？ 干渉しすぎなのか、関り方が少ないのか？ 逸材をつなぎとめるための資金の不足なのか、払い過ぎなのか？
- ・主審・副審、メディア、ファンさえ悪者にされたり、負けの責任の一端をかつがされたりするのはなぜなのか？

スポーツそれ自身の敗北だってありえなくはない。スポーツには観客やファンが、あるいは放映権やメディアの取材が減ったり増えたりする波がある。これには多くの場合、他のスポーツとの競合も関わっている。1990年代初めJリーグのプロフェッショナル・サッカーが日本で始まったころ、日本プロ野球機構(JPB)はかなりの危機感を持った。人気も収入も減り、終末論さえ聞かれた。しかし、反撃に転じ、現在落ち目なのはサッカーのほうであり、2002年のワールド・カップがこの傾向に歯止めをかけるかどうかかわからない。一方JPBもまた、花形選手がアメリカのメジャーにつぎつぎと流出して、新たな危機を迎えている。

スポーツにおける敗北研究

著者の分析に移る前に、ここでスポーツにおける敗北論や失敗に関する研究を確認しておきたい。なぜなら、それらはとても示唆的であるからだ。たとえば、社会学者 William J. Goode (1967) はチーム・スポーツを例にとって「無能の保護」、すなわち、足りない者を能力ある者が補い、チームとしてはそれらすべてのメンバーがあってこそ成り立つのだと分析した。また役割論から、成績の悪いとき、選手としての自分とプライベートな自分との間に距離をおき、自己防衛するといった分析を Goode は「役割距離」の概念で説明した。また「スケープ・ゴート」の論理で、監督交替劇を論じた社会学者もいる。あるいは Erving Goffman (1952) の「降格」（敗者は降板）、「冷却」（姿が消えいつか忘れ去られる）といった逸脱論からのスポーツの敗北研究もある (cf. Ball 1976)。

スポーツ経済学では、敗北そのものには注目しない。すくなくとも敗北の社会的ダイナミクスは扱わない。しかし、日米の経済学者は予見モデルを作ったり、成功・失敗の因果関係を調べたりするために、競争均衡、ホームゲームの有利性、監督の手腕、選手ボーナスの実効性などを分析している。また、アメリカの野球研究では、アマチュア研究者が数理的分析の手段として「sabermetrics」^{注3)}を考案したが、その目的は、経済学同様に解説と統計のためにあり、敗北そのものに注目するものではない。

認識心理学、神経心理学の分野でも示唆に富んだ文献がいくつかある。特にアメリカの発達心理学者 Daniel Willingham (in Gladwell 2000) は、スポーツのここの一番というところでプレッシャーに負けて、へまをやらかした時に、我々が最もよく口にする「頭が真っ白になる」・「パニック」という問題を扱った。Willingham の実験によれば、このふたつは別物で、外的学習と内的学習のふたつの異なる学習形態に起因するものらしい。外的学習とはテクニックについて指導され、技術を習得することである。たとえば、若い選手がコーチにバットのスイングやダブル・ブ

レイを教わるのがこれに当たる。しばらくすると学習は内的学習になる。何時間も何年も身体に覚えこませてプレイするうまい選手には、独特の勘と技が生まれ、それはまた高度な技術には欠かせないのである (Willingham によれば、このふたつの学習は脳の異なる部位が関係するという)。この内的学習がくずれた時、頭が真っ白になり、外的学習に頼らざるを得ず、何をしているのか、何をすべきなのかについて選手は頭で考えはじめ、そして考えすぎるのだ^{注4)}。もちろん Willingham の研究は、めったにない、だからこそ致命的敗北の場合にあてはまる。

最後に、文化人類学を振りかえてみよう。確かに、人類学にとって様々な文化がいかにして不確実性と不幸にたちむかうかは、魔術と宗教人類学の発展の大きなテーマだった。なかでも Bronislaw Malinowski (1948) のトロブリアン島の(サンゴ礁の内海や大海で、待ちうける数々の危険についての)呪術・科学・宗教研究は有名であり、Edward Evans-Pritchard (1976) によるアザンデの研究は、非難を社会化し精神化して説明するための完結した論理のシステムとして、呪術と魔術を扱ったものだった。

現代の文化人類学者 George Gmelch (1972) は Malinowski の概念を用いて有名な「野球のマジック」の論文を書いた。文化人類学者に転じる前はマイナー・リーグのプロ選手だった Gmelch は、野球選手らがリスクと不確実性に立ち向かうために繰り返すお決まりの儀礼・タブー・ジンクスの数多くを、驚きと苦笑を禁じえない綿密な観察眼で開示してくれた。Gmelch の仮説は、こうした「野球のマジック」は野球のどの局面でも満遍なく見られるということだった。しかし、野球におけるピッチング・バッティング・フィールドイングの3つの基本的動作のうち、ピッチングとバッティングはフィールドイングとちがって、迷信に満ちていることを彼は見出した。

著者がここで付け加えたいのは、Gmelch の観察と分析は日本のプロ野球選手にも当てはまる点だ^{注5)}。しかし、Gmelch も言っているように、この分析で「野球のマジック」が、自信増進の儀式と縁起かつぎの論理との完結したトータル・

システムであるアザンデの魔術に匹敵すると主張するのではない。むしろピッチャーのかつぐ迷信の類は、敗北よりも成功を意識して、不確実性に立ち向かうためのものではないだろうか。

敗北の合成モデル

これまで、スポーツにおける多くの敗北の局面、敗北トークの頻繁さ、それでいて誰がなぜ失敗したのかが一向にはっきりできないもどかしさについて述べてきた。他の分野の先行研究にも気掛かりな示唆は得られるものの、スポーツにおける敗北全般の問題や阪神のなぞを解決するのに、直接役立つものは見当たらなかった。どうしてタイガースは弱いのに人気は衰えないのか。このことに関しては、ひとつの要素で説明がつかないことが先行研究からうかがえた。おそらく、異なった要因が異なった普遍的レベルに存在するのだろう。したがって、阪神タイガースの敗北を解明するには、解釈の合成モデルを用いてみる必要がある。そこで、著者は次の4つの要因を設定したいと思う：

- (1) 全てとは言えないまでも多くの競技スポーツに共通するもの。
- (2) スポーツとしての野球に特有なもの。
- (3) 北米やドミニカ・キューバの野球になくて日本の野球に特有なもの。
- (4) 阪神タイガースに特有なもの。

以下でこれら4つの主要因について考えていきたい。

(1) スポーツに共通する要因：競技の「リーグ」構造とその成功と敗北の定義の流動性

おおまかに言って、近代スポーツにおける競技は次の3つの組織化のうち、いずれかにあてはまる。まず、野球を含めていくつかのスポーツは、エキシビション競技として始まった。それは対抗試合であったり、アメリカで barnstorming (道場破り) とよばれる巡業 (特定の個人やチー

ムが地方に巡業して、その土地の個人やチームに試合を挑んだり、巡業チーム同士で試合を見せたりする) であったりした。19世紀にはボクサーや長距離ランナーが田舎をめぐり、祭りや催しに現れては、名乗り出た地元の選手と一戦を交えたりした。初期のアメリカの野球チームでは、とりわけシンシナチ・レッド・ストッキングスが1869-70年にツアーをしたことで有名である。また、バスケットボールではハーレム・グローブ・トロッターズが何十年も世界ツアーをしている。対戦相手はいっしょにツアーをするワシントン・キャピタルズだったり、地元チームだったりする。

第二の形態はトーナメント方式である。ここでは個人の選手やチームが定期的集まり、そのためにつくられた組み合わせで対戦する。日本の高校野球はもちろん、ほとんどのスポーツはトーナメント方式で戦われる。1999年の高校野球を例にとると、6月に4101校が約50の出場権をかけたトーナメントに臨み、勝ち進んだ48校が8月に甲子園での大会に出場する。敗者復活戦もあるが、トーナメント方式の典型は負けたら再挑戦できないノックアウト方式で、敗北とは「一度負ければ万事休す」とはっきりしている。

第三の形式はリーグ制である。大方のプロフェッショナルのチーム・スポーツが、これに変わってきている。一定の限られた登録チームが定期的に対戦し、シーズン期間は長い。たとえば、日本のプロ野球は1950年からそれぞれ6チームからなる2リーグに分れていて、各チームが現在では7ヶ月のシーズンに140試合を戦う。そして、それぞれのリーグの覇者が日本シリーズで対戦する^{注6)}。

一般的に言って、近代の見るスポーツは、ボクシングのような個人スポーツも、フットボールや野球のようなチーム・スポーツも、初期には barnstorming が主で、後にリーグ制やトーナメント制に変わったのである。スポーツによっては、リーグとトーナメントのどちらも取り入れたが、一般的にはどちらかに重点がおかれている。プロのスポーツの多くはリーグ制をとり(ゴ

ルフとヨット競技はとりわけ例外)、アマチュアのスポーツはトーナメント制が今でも主流である。Eric Leifer (1995) はリーグの組織形態の特殊性を浮き彫りにした。その誕生は歴史的必然というよりも、20世紀初めのスポーツ起業家たちによって作りだされたものなのだ。彼等はリーグ構造が、チームをひとつところに繋ぎとめ、ファンをチームに、選手をチームに互いに繋ぎとめる利点のあることを知っていた。つまり、リーグ制は持続性、予測性、安定性、そして利益をもたらすことを知っていたのだ。

ここで著者がリーグ構造に特に言及するのは、リーグ制によって競技にさまざまな視点をもたらされるからである。リーグ制は1シーズンに1チームしか優勝できないという明白な目標があるが、それが決まるまでには、ファンは勝ち負けに関して様々な応援の方法を見つけ出す。日本の野球でみられるのは次のような点である：

1. チーム成績による順位の上がり下がり：プロ野球機構の2リーグに所属する6チームはシーズン中の140試合で順位を常に変える。したがって各チームの順位と変動が重要になる^(注7)。
2. ベナント・レースから脱落しないこと：「ベナント」レースとそこから脱落しないことが順位に加えてシーズン中の話題となる。チームに競争力があり、ベナント・レースから脱落しないうちは敗北とはみなされない。このことは財政面でも大事な点となる。シーズン早々あるいは中盤で脱落したチームは、観客の入りが悪くなって収入減となる^(注8)。
3. Aクラス/Bクラス：各チームの6つの順位は、さらに上位3チームの「Aクラス」とそれ以下の「Bクラス」とに分けられる。このことは各チームにAクラスに入り、そこに留まりシーズンを終えるという別個のランキング目標をあたえる。ふたつのランキングの最も大きな違いは、Aクラスのチームには翌年の開幕戦をホームで迎えられる権利が与えられる点である^(注9)。たとえば近鉄バッファローズは、1997年シーズンの開

幕戦を完成まもない大阪ドームで行いたかったので、1996年シーズン中、Aクラス3位を維持しようがんばった。このときバッファローズは、1993年に完成した福岡ドームで開幕戦を行いたくもAクラス入りできず、願いをかなえられなかったダイエーホークスのことを意識していたにちがいない。

4. 勝率5割の壁：たとえ弱いチームでも、シーズン成績を勝率5割かそれ以上で終えれば、それなりの評価がえられる。スポーツ・メディアは金融用語を借りて「貯金」と「借金」という新表現をみだした。ちなみに「借金5」は、勝率5割に5ゲーム足りないことを意味する。
5. 勝利の「カード」：日本のプロ野球チームは、リーグの他チームと年26から27回対戦する。たとえば阪神がシーズン優勝できなくても、特定のチーム（特に読売ジャイアンツ）との対戦成績がよければ、何らかの達成感がえられるのだ。
6. 「再建」の年：最後に、連敗続きでそのシーズンの目標がすべて失われても、翌シーズンのためにがんばることができる。ベテラン選手がベンチにさがり、若い選手が試合に出て、チームは翌シーズンのための土台作りをアピールできる。期待も失望もお預け状態となって、時間の猶予ができるのだ。

以上のように、1シーズンを戦う動機づけと意味づけが成り立っている。シーズンを通して、つねにプレッシャーと興味が創り出され、リーグ内の優勝チーム以外の5チームに補足的な目標があたえられる。その意味で、阪神タイガースの1992年からの10年間は、翌年もっと成績が上がるかもしれないとの予測から、期待を裏切り続けた歴史だったと言える。

(2) 野球に固有の要素である明確なテンポラリティ（一過性）

スポーツは本質的に観る者の注意を動きの瞬

間にひきつけるが、どのスポーツにも時間的側面がある。たとえば絶えず動きまわる、サッカーやバスケットボールのような時間の「流れ」のあるスポーツと、アメフトや野球のような、ひとしきり動きがあるかと思うと、次の動きのまで動きが完全に止まり、作戦が練られるといった時間の「インターバル」のあるスポーツのふたつに大別できる。だが、ここで著者が言いたいのは、リーグ方式のシーズン制にともなう一般的な特質と、野球そのものの一過性 (temporality) の特徴とがあいまって、敗北と敗北トークとを増加させ、かつ中和させるという点である。

第一に、他の多くのスポーツと比べて、野球は多分に多様な時間軸 (polyrhythmic) を有している。1 シーズンの中に、各チームの勝敗記録とあいまって、どのように複合的な競争をもたらしているかはすでに述べた。しかし、シーズン制だけでは野球の時間的なサイクルをほとんど説明できない。野球は、1 イニングで打者に対する何分かにわたるピッチングから、試合の序盤・中盤・終盤、延長といった様ではない時間的サイクルで成り立っている。また、三連戦、シーズン前、シーズン中、シーズンオフについても同じであり、10年から20年に及ぶ選手生命や何十年間のチームの変遷もまた時間のサイクルである。

さらに、これら異なったレベルのリズムが何度も繰り返す。つまり、野球は繰り返しのスポーツなのだ。もちろん、記録は残り、年俸・選手生命・利潤・名声が確立される。他のスポーツと同様、繰り返さない性格も持ち合わせているが、野球はほとんどのレベルで繰り返しをともなうものである。次の打席、次のイニング、次の試合、翌月、そして翌シーズンでの巻き返しに期待すること自体が繰り返しのものだ。

(3) パフォーマンスと責任の日本的展開

以上見てきたように、多くのプロ・スポーツの中でも野球にみられる特徴は際立っており、日米のみならず、Alan Klein (1991) などによれば、カリブ海や南米の野球における、敗北・不確実性・非難の諸条件についても同様であると言う。

しかしながら、今度は第三の点、つまり日本の野球において慢性的敗北も含めた敗北全般を説明したり、受け入れたりする特徴はあるのだろうか。

日本の野球が他の国の野球とは大きくちがっているという見方には事欠かない。たとえば、Robert Whiting (1990), Marty Kuehnert (1988) や大方の外国人記者の見方はそうである。著者は常々こうした誇張は間違った理解につながるかと考えているし、敗北がどう受けとめられているのかを理解するには役に立たないと考えている。たとえば、進歩的異質モデルは個人を押しつぶすほどの集団主義を強調する。そして非難が個人に向けられるより、むしろ集団に向けられると主張する。ところが、著者が野球界でインタビューした人々は、選手・コーチ・監督・球団幹部などの個人を名指しで非難する。また、多くの外国の解説者は、日本人は面子を重んじるばかりに引き分けを好み、どちらかが負けるのを避けようとすると言う。これもまた現実とは異なる。引き分け試合は数少なく (著者の計算では1936年から1999年までの公式・非公式戦で引き分けはほぼ4%)、選手や監督の誰からも面子を保つ話など聞かなかった^{注10)}。

最後に、Karel van Wolferen (1989) などの解説によれば、日本の組織にはアカウントビリティ (説明責任) がないので、責任と咎めが拡散したり、立ち消えたりするのは仕方がないのである。彼の「日本の権力の謎」では、日本は中心がなく、権威が欠落していると指摘した。事実、権威を振りかざし、傲慢にみえる何人かの監督やオーナーもいるが、失敗を許し、敗北を受け入れ、そして、そのことを詫げる日本の選手や監督の素直さは注目に値する。つまり、抗議の日本の特徴は、深刻な問題に限られるのである。

一方で、日本の野球には特定の行動傾向に脚光を浴びせ、英雄視する重要ないくつかのレトリックがあることを指摘したい。ひとつは努力と精神力の言説で、これには、がんばる、努力、精神、根性などの言葉が使われる。もちろん、スポーツの世界でこうした言葉つかいや態度は普遍的ではあるが、この努力の言説は歴史的な理由から日本

のプロ野球でとりわけ大きく深い響きを持つようになったと著者は考える。すなわち、アメリカの場合とは逆に、日本のプロ野球はアマチュアの野球から派生した。1930年代に日本初のプロ・リーグは、それまで長く国民に愛されてきた学校対抗の野球、つまり、当時の高校や大学対抗野球から生まれたのだ。したがって、プロ野球が国民に受け入れられるように、学校野球の特徴を取り入れなければならない、そのため「根性」といった言説を使わなければならない¹¹⁾。

著者のテーマにとってこのことの重要性は、努力や練習の失敗の帰結としての負けを説明する方が、才能のなさで説明するよりは有効だからだ。ひとつのプレイに全力投球しなくてはならないが、仮に負けたとしても、まだ努力が足らなかった、準備不足だったと言い訳ができる。才能や力不足よりも、練習を積み、もっと専念するという言葉は、悪い点を改めていこうとするきっかけを常に与えてくれる。それは、敗北は打ち勝てるものであって、永久ではないという意味を含んでいる¹²⁾。

日本のプロ野球で取り上げたい二つ目の特徴は、内省と反省の重要性である。外国人選手は、試合の前の準備と試合後の評価のために開かれる長いチーム・ミーティングに、常に不平をこぼす。重みと程度のちがいはあるが、メジャーリーグを含むどのスポーツにも、個人的な内省はつきものである。しかし、日本では活動の後に組織的にみんなで行われる長い反省会は、小学校に始まり一貫して学校の中心的教育なのであり、成人社会においても、たとえば品質管理会議などに取り入れられている。

(4) 阪神タイガースに固有な特徴

阪神は日本のスポーツ界で最も成績が悪いにもかかわらず、最も愛されているチームだ。この15年間セントラル・リーグの6チーム中最下位、監督が何回も交替し、ドラフトでルーキーも引けず、外国人選手の選択もまずい。しかし、観客数、利益、メディアの注目度は全12球団中、読売ジャイアンツについて二位である。

このように、敗北と非難のパターンを形成する全チーム共通の特徴以外に、阪神に固有な特徴がある。それは、チームの「生え抜き」的な狭量さ、出来の悪い息子に対する地元ファンの甘やかし、大阪の第2位都市としてのコンプレクスの3点によって正当化されることである。

「生え抜き」主義：もろもろの理由から、阪神は引退後の花形選手をコーチや球団職員にたびたび迎えてきた。監督も名だたるOBからリクルートする傾向がある。そのため阪神のOBは悪名高い影響力を持ち、この狭量さが固有の派閥主義をうむことになる。メディア解説者、ファン、タイガースの選手や球団側も、阪神が外部から監督や球団運営の専門家を一向に迎えようとしない点を非難している¹³⁾。

甘えん坊扱い：舞台裏でのいつもの仲違いや表だった喧嘩、球団の選手獲得に対する「けち」ぶりといったことに対し、阪神をなかなか大人になれない世話のやける出来の悪い息子にたとえ、それゆえに、愛すべきチームとしてファンは甘えん坊扱いするのである¹⁴⁾。

第二都市としてのコンプレクス：他のファンや解説者は、阪神の難しさに、もっと甘酸っぱい理由をつける。それは関西経済の苦境である。1930年代にプロ野球が始まったころ、東京・大阪はほぼ同等の大都会だった。むしろ大阪が企業の強さと野球のインフラでは勝っていたのだ。このバランスは1950年代に東京が圧倒的有利となって、1964年の東京オリンピックでその優位性は決定的になった。1960年代の中ごろから、数ある在阪の野球チームの中でも、阪神タイガースが東京の一極集中に対して、大阪と関西を象徴的に背負って立つようになったのである。タイガースの苦戦は、いつしか関西の経済力・政治的影響力・文化的栄光の翳りと、国の強力な中心からの侵害との換喩となり現在にいたっている。一極集中の国における第二都市コンプレクスは、阪神がいつも弱い事実と、その原因との理由づけにしばしば使われるけれども、だからといって弱さが心地よくはならない。

スポーツの合理性の中心にある非合理性

阪神タイガースは、日本の野球界での愛すべきかつ気のもめる敗者という点で特異かもしれない。しかし、そのことは、いかにして人は勝とうとして負けてしまうのかという動かし難い事実の前に、どのようにして試合中・試合後の両方の場面で、これに対処するのかを問うとき欠かせない存在となる。著者は、単純な答えはないと考えているが、勝つことの困難さを受け入れるための理由づけ、レトリック、決まりきった文句といったものは見いだすことが出来るとも考えている。長年の負けにもかかわらずファンが阪神タイガースを支え続けるのは、スポーツに共通する特徴（リーグ制）、野球に固有の特徴（明確なテンポラリティ）、日本の野球に固有の特徴（内省・反省の慣用語）、阪神に固有かもしれない特徴のすべてを見出してこそ、はじめて理解できると著者は提案した。

残念ながらすっきりした答えはないものの、著者の要因合成分析では、スポーツという経験の本質を反映できたと思う。すべてのスポーツの形態は、その国から世界に向かって続くさまざまな要因によって形作られていく。日本の野球は、単に日本的な野球としては説明できない。それは、他国の野球と重要な特徴を共有するからである。また、野球そのものに固有の特徴がある一方で、競技スポーツのすべてに共通する面もあるのだ。

Guttman (1978) が近代スポーツの顕著な特質とした競技の合理化は、定式化・数量化をもたらしても、確実性をもたらすはしない。将来の成績を予知する確かさも、過去の成績を評価する確かさももたらさないのだ。われわれがスポーツの現場で瞬間瞬間を予測できなくても不思議ではない。だが、近代スポーツの高度な合理性をもってしても、何が起こったのか、つまり一握りの者の勝利と大部分の者の敗北という結果の分析に、確かさをもたらさないのは意外である。

結論的に述べるならば、打席終了であれ、イニング終了であれ、試合終了であれ、シーズン終了であれ、選手生命終了であれ、その瞬間のサスペ

ンスを終わらせてくれる。しかし、次なるものへのサスペンスの条件をきわだたせ、たった今の結果が誰の責任なのかの謎は深まるばかりだ。この恒常的不確実は、スポーツの合理性の中心にある Weber 的非合理性なのだと言者は結論づけたい。

注

- 1) その後、この発言を彼は後悔したという。David Maranniss (1999) による最新の伝記を参照されたい。
- 2) しかし、実際にスポーツが近代の中で消滅してしまうことはあるのだろうか。そんなことはまったく考えられない。
- 3) "Sabermetrics" は、素人ながら野球研究を深く極めたファンと学者らによって 1971 年に設立された SABR (アメリカ野球研究協会) の造語。Bill James が権威ある案内書を複数出版し、影響力に富む公式をいくつか考案して協会の推進力となっている。日本については Daily Yomiuri 紙のスポーツ・ライター、Jim Allen が 1994 年から 1997 年まで毎年出版された興味深いガイドブックで、JPB に Sabermetrics をあてはめて述べている。
- 4) したがって、頭が真っ白になるのは外的学習に思わず頼ってしまったとき、パニクるのは覚えたことを忘れてしまったときに起きる。
- 5) 日本語で superstition の最も一般的な訳は「迷信」にあたる。このような「おまじないのマジック」は、神から受ける慈悲としての「運」とは区別される。日本のスポーツでは「勝利の女神」という言い方にこのことがあらわれている。一方で luck や chance は「ツキ(付くという漢字があてはまるが、ふつうはかたかなで書く)」という表現であらわされる。ツキは、対戦相手の「あたり」の良し悪しにも使われる。「ツキがない」という表現は、"we just can't get lucky" にあたる。もし日米の選手のおまじないが似通っているとすれば、総じて日本選手や観客がアメリカにくらべて、結果を運・チャンス・ジンクスのせいにするのが多いのではないかと考えられるが、この点については著者はまだ判断できない。

- 6) したがって「トーナメント」でリーグの終わりを飾るといえるが、日本シリーズ、MLB ワールド・シリーズ、NBA と HHL のチャンピオンシップでは実際は数連戦（7 試合中 4 勝しなくてはならない）行うのである。これからくる緊張感は、トーナメントよりは短いリーグのそれに近い。NFL プレイ・オフやスーパー・ボールは、純粋なノックアウト方式のトーナメント制である。
- 7) MLB と JPB にはチーム成績の表しかたに面白い違いがある。アメリカではチーム成績は「首位との差」の表で、それぞれのチームが首位と比べてどれだけ負けが多いのかが示される。日本の場合、ゲーム差は表示されるが、各チームが「順位のひとつ上のチーム」にどれだけ差があるかが示されるのだ。
- 8) あるチームに優勝マジック（残り試合でどれだけ勝てば無条件に優勝できるか）ができることによって、他のチームはペナント・レースから脱落したことになる。
- 9) したがって、ここから勝ち組・負け組、3 強・3 弱の区別もうまれる。
- 10) 日本人の感覚では「敗北には気高さがともなう」とも言われてきた（Ivan Morris の有名な著書、*The Nobility of Failure: Tragic Heroes in the History of Japan*, 1975 年 が然り）。華々しい負けのほうが勝利よりも尊ばれるというのだ。これもまた勝つことへの意欲やプレッシャーを考えると疑わしい。そうした悲劇の野球ヒーローもあるかもしれないが、最も人気がありそうなのはアメリカの漫画主人公 Charlie Brown だ。これほど、ドジで英雄的な野球の負けヒーローは後にも先にも彼しかいない。
- 11) プロ野球は当初、定期的なトーナメントをおこなっていたが、ほどなくリーグ制にのりかえた。学校野球がことさらトーナメント方式に重きを置くこと、とくに高校野球には春夏のトーナメント大会が一大行事であることは、プロ野球には頭が痛い。アマからプロ選手になる若者達が順応しなくてはならない最大の点は、負けを日常茶飯事と受けとめるようになることだ。リーグの覇者でもめったに勝率 6 割には達しないのだ。また、ルーキーは一度負ければ次が無いというアマチュアの
- 競技から脱出しなければプロにはなれない。さらに、このことによって引き分けを目指して戦うといった外国人の誤解がうまれるのかもしれない。日本で一般的なトーナメントに臨む戦略は、「負けない意識をもつ」ことだ。いささかがむしやらの哲学、「何としても勝つ」にくらべると、より保守的な「何としても負けない」哲学である。とはいえ、やはり勝たなくてはならないと言っているのではないか！
- 12) もちろん、敗北が能力の欠如として説明されるのではなく、改良の余地ありという説明が行われるところに、外国人選手と日本人選手の扱いに違いがあることの原因が存在するかもしれない。外国人選手はその努力ではなく能力を値踏みされるので、成績が悪ければ即刻解雇となる。
- 13) なかでも注目すべき例外は、最近のふたりの監督で、ひとりには 1999 年から 2001 年までつとめた野村、もうひとりには 2002 年からその後を継いで迎えられた星野である。
- 14) 著者は別の論文で、あるファンの気持ちを引用した：「自分の子が幼稚園で徒競走にでたときのよ様な心持ちです。一等賞をとるかより、最後まで走ってくれ、怪我をしないでくれ、と一所懸命応援するわけです。タイガースを応援するというのは、そういうことなんです。」（鹿岩社編集部，1996: 60）

引用・参考文献

- Ball, Donald W,
1976 "Failure in Sport", *American Sociological Review* 41 (4): 726-739.
- Evans-Pritchard, Edward E.
1976 *Witchcraft, oracles and magic among the Azande*. Oxford: Clarendon Press.
- Gladwell, Malcolm
2000 "The art of failure: why some people choke and others panic", *New Yorker* (August 21 & 28), pp. 84-92.
- Goode, William J.
1967 "Protection of the inept", *American Sociological Review* 32: 5-19.

Goffman, Erving

1952 "Cooling the mark out: some adaptations to failure", *Psychiatry* 15:451-463

Gmelch, George

1972 Magic in professional baseball. In George P. Stone, *Games, sports, and power*. 128-137. New Brunswick, NJ: Dutton.

Guttman, Allen

1978 *From ritual to record: the nature of modern sport*. New York: Columbia University Press.

Klein, Alan M.

1991 *Sugarball: the American game, the Dominican dream*. New Haven: Yale University Press.

Kuehnert, Martin P.

1988 『日本野球一刀両断：外人選手 170 人の証言』

Malinowski, Bronislaw

1948 *Magic, science and religion and other essays*. Garden City, New York: Doubleday.

Leifer, Eric M.

1995 *Making the majors: the transformation of team sports in America*. Cambridge and London:

Harvard University Press.

Maraniss, David

1999 *When pride still mattered: a life of Vince Lombardi*. New York: Simon & Schuster.

Morris, Ivan

1975 *The nobility of failure: tragic heroes in the history of Japan*. New York: Holt, Rinehart and Winston.

鹿砦社編集部,

1996 『なんとかせんかいタイガース!!』西宮: 鹿砦社.

van Wolferen, Karel

1989 *The enigma of Japanese power: people and politics in a stateless nation*. New York: Alfred A. Knopf.

Whiting, Robert

1990 『和をもって日本となす』東京: 角川書店.

[訳：宮原かおる（エール大学大学院）、

監訳：杉本厚夫（京都教育大学）]